

3. 令和7年に特に注意を要する病害虫

(研究成果名：令和7年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫)

道総研 中央農業試験場 病虫部 予察診断G

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から令和7年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 令和6年度の病害虫の発生状況

令和6年度は春季から秋季まで高温に経過し、病害虫の発生・飛来や増殖が早くから認められた。特に、前年の発生量が多かった春まき小麦のムギキモグリバエやてんさいの褐斑病では初発が大幅に早く、その後の発生も多かったため被害が多発した。主要病害虫で多発となったのは、秋まき小麦の赤さび病、大豆のタネバエ及びびりんごの腐らん病だった。やや多発となった病害虫と併せて表1に示した。

表1 令和6年に多発・やや多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水稻	縞葉枯病 アカヒゲホソミドリカスミカメ
秋まき小麦	赤さび病、眼紋病
春まき小麦 (初冬まき)	ムギキモグリバエ
大豆	わい化病、タネバエ
ばれいしょ	そうか病
てんさい	褐斑病、ヨトウガ(第2回)
りんご	腐らん病

下線は多発生となった病害虫を示す

一方、低温や湿潤条件下で発生しやすい病害の発生は少なかった。小豆・菜豆の菌核病や灰色かび病、ばれいしょの疫病、小麦の赤かび病、積雪期間が長い年に被害が目立つ小麦の雪腐病では少発生となった。

前年に道内初確認されたトマトキバガは、令和6年も全道各地で飛来が確認された。ハウス内で越冬したと考えられる発生により春季から加害が確認されるとともに、夏季には全道各地のトマト・ミニトマトで被害が確認された。前年、道南・道央を中心に全道各地域で認められた小豆のマメノメイガは、令和6年も発生、加害が認められた。また、高温性の病害であるぶどうの晩腐病が多発した。

3. 令和7年に特に注意を要する病害虫

1) 小麦の赤さび病

本年度、これまで発生が比較的少なかった地域でも秋まき小麦の赤さび病が多発し、道央では春まき小麦「春よ恋」でも多発した。発生が多かった地域では病原菌の越冬量が多く、初発が早まることも想定される。また、これまで発生リスクが高くなかった地域でも本年の発生量によっては高リスク圃場に対応した薬剤散布を検討する必要がある。本病は散布タイミングが遅れると、十分な防除効果が得られないので、防除適期を失しないようにする。

2) トマト・ミニトマトのトマトキバガ

本種は侵入警戒有害動植物であり、道内では令和5年に初めて飛来が確認された。本年度は全道各地で前年を上回る飛来を認め、ハウス栽培トマトで葉や果実の食害が確認された。特に、前年に発生が認められた地域の越冬ハウスでは育苗期間中から食害が確認された。新たに本種の発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター等に連絡し、発生を拡大させないため、薬剤散布、被害残渣の適切な処分、越冬ハウスではナス科雑草等の寄主植物を除去するなどの防除対策を行う。

3) ぶどうの晩腐病

生食加工用や醸造用ぶどうで収穫直前に本病による果実の腐敗が多発し、一部の地域では収量が大きく減少した。本年度の発生状況から次年度の一次伝染源が多くなることが推測される。被害を軽減するためには、第一次伝染源となる結果母枝上の分生子を抑制する休眠期と、新梢や果実への感染を防ぐ生育期の防除を実施する事が重要である。降雨が連続する場合には追加散布も必要となり、使用時期に制限がある薬剤も多いことから、本病は薬剤だけで対処する事が困難であり、巻きひげや前年果梗の切り残し部分の除去、被覆栽培や袋かけ、こまめな新梢管理、排水対策などの耕種的防除が重要となる。

特に注意を要する病害虫および新発生病害虫の詳細な情報については、北海道病害虫防除所のホームページに掲載していますので、そちらもご覧ください。



4. 令和6年度に新たに発生を認めた病害虫

令和6年度に新たに発生を認めた病害虫は12（病害4、害虫8）ある。一部を抜粋して紹介する。

1) 小麦および大麦のクビアカクビホソハムシ（国内新発生）

6月上旬、秋まき小麦及び大麦で、ほ場全体に止葉を中心としてかすり状の短い食痕が認められた。本種は海外では穀類および牧草の重要な害虫であり、とうもろこし、ライムギ、エンバクおよびチモシーなどでも発生が報告されている。なお本種の幼虫は、小麦の害虫で近縁種のムギクビボソハムシとよく似ており、幼虫形態から識別することは困難である。

2) 大豆、小豆、べにばないんげんのホソヘリカメムシ（新寄主）

8月から9月にかけて大豆、小豆およびべにばないんげんのほ場で、葉上に多数のカメムシ類成虫およびアリに酷似したカメムシ類の幼虫が確認された。本種は収穫後の子実に吸汁痕を生じさせた。本種は本州では大豆で防除対象となっている害虫だが、北海道では令和4年に菜豆で初めて作物の被害が報告されており、近年の温暖化に伴って、北海道内で分布域を拡大している可能性がある。